

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008 年度 参加者レポート

浅野 浩代 ---Lincoln University

中間レポート

私は 2008 年 8 月から、Fulbright の FLTA プログラムに参加し、Pennsylvania 州 Lincoln University というところで日本語教師として働き、同時に、他の学生と同様、いくつかの授業を受講しています。

プログラム名は「Assistantship Program」ということになってはいますが、派遣される大学によっては、私のように、その大学で日本語の全授業を任されることもあるようです。今回渡米するのは、私にとって初めてのことであり、ましてや、日本語教師として働くというのも、初めてのことです。とはいうものの、異国の地に行くということについては、緊張するというよりは今まで積んできた経験と知識を『実践する』絶好の機会!!と考え、あまり不安に思うことはありませんでした。



ここ Lincoln 大学へ来る前に、RI 州 Brown 大学へ行き、その大学の教授陣の下で「米国の大学で言語を教える、いろは」を教えていただき、実に密度の濃い研修に参加しました。そのおかげもあり、ここ Lincoln 大学へ来る頃には、心身共にかなりリラックスすることができました。

しかし、実際に大学の授業が始まるやいなや、状況は一転。実にめまぐるしい日々の毎日でした。まず、日本人の教授が一人もいないということで、私が計3クラス（初級・中級・上級）の授業のコースデザインから成績管理まで、全責任を負っていかねばならず、これら全てが初めての経験であった私にとって、ほとんどの時間を、これらの仕事に費やしました。

また、ここ Lincoln 大学というところは、Historically Black University とカテゴライズされる大学で、基本的に黒人の学生しかいません。加えて、日本人はおるか、「アジア人」自体もほとんどおらず、私が大学構内を歩いていると本当に珍し



がられます。私はこれまでに日本以外の国で留学した経験はありますが、今回のような状況下に置かれたことは初めてで、実に「異文化」を肌身で感じている毎日です。

ですが、秋 semester では、「African American Experience」という授業を他の学生と共に受講し、その授業を通して、黒人文化・歴史について深く学ぶことができ、徐々にこの大学内での様々な状況も理解できるようになりました。「教える」ということと、「学ぶ」ということを同時にするのは、決して容易なことではありませんが、他の学生と同じように授業を受けることにより、「学生からの視点」も理解できるようになり、自分自身が「学生に授業をする」際に、大変役に立ちます。

また、日本語の授業以外に、日本語サークルの顧問もしています。そこでの活動はとても意義のあるもので、日本に興味のある協力的な学生たちと本当に楽しく濃い時間を過ごしています。

これから今年の五月までこの大学で学び、働き続けますが、ここでの FLTA としての経験全てが、一生私を勇気付け、そして決して忘れることのできないものとなると、今、胸を張って言えます。



フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

藤田 恵里子 ---U. of Scranton

中間レポート

ペンシルベニアの北東部に位置するスクラントン大学に派遣されてから早くも5カ月弱が経ちました。同州はもともと白人約85%、アジア人約2%と、アジア人の少ない地域のように、実際スクラントンのアジア人率もかなり低く、特に日本人も日本のものを見かけることもほとんどありません。

生徒数は初級8名、中級3名と少なかったのですが、日本語教育の経験が全くない私が唯一の日本語担当教師ということで、シラバス、授業案及び教材、テストの作成、成績づけなどを一人でこなしました。秋学期は、日本語教授に関して相談できる人もいない状態で常に一人で暗中模索し続けていた気がします。それでも、積極的に授業に参加してくれる生徒がかわいく、授業作成のモチベーションになっていました。また、日本語を教えるという経験ができたこと、またそれをまったく一人で、しかも大学レベルでできたことは自分にとって大変良い経験と自信になったと思います。

スクラントン大学は、文化理解等のイベントがないため、生徒にも日本の文化を体験させる機会がなかなかありませんでした。しかし、学期末に「ぜひ生徒にアニメ以外の日本も知ってほしい」思い、「お茶会」を開催しました。テストで急がしい時期で、参加できた生徒は少なかったのですが、みんなとても楽しんでくれました。このような機会を一から自分で企画し、実行に移すこともまた、とてもよい経験になったと思います。



このプログラムのもう一つの目的は、アメリカの文化を自国に持ち帰るということですが、スクラントン大学の担当者に言われて、アメリカをものすごく感じた言葉があります。それは、

「シラバスは生徒との契約だ」という言葉でした。シラバスと授業を異なる授業を行うことは生徒との契約に違反することで、場合によっては訴えられることもあるということでした。この言葉で、アメリカがいかに訴訟社会であるかを痛感しました。

また、日本語を教えるほかに、大学院のコースを2つ受講しました。大学を卒業してからだいぶ経っているため、久しぶりの大学生活はとても新鮮で、学ぶことの喜びを再認識しています。特に前学期受講したコースはいずれもESLのクラスだったのですが、以前英会話スクールで教えていた経験のおかげで、授業をよりよく理解することができ、仕事をしてから学校に通うことの利点を感じています。

学生と教員という二足のわらじを、ましてや言葉も文化も違う異国の地で体験したことは、苦労だけではありませんが、この経験が今後の人生の糧になるだろうことは間違いありません。そして、アメリカでの生活を通し、客観的に日本と日本人の良さを感じることができたことは大きな収穫だったと思っています。このような機会を与えていただいたこと、また日米教育委員会の皆様のサポートに本当に感謝しています。



フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

福西 啓子 ---Colorado College

中間レポート

初めまして。私は、フルブライト FLTA としてコロラドカレッジに派遣されています。福西恵子といます。コロラドカレッジは、アメリカ合衆国西部のコロラド州、コロラドスプリングというパイクスピーク地域に属しています。パイクスピークやロッキー山脈付近にあるので、高度が高く冬にはスキー愛好者にはたまらない、良い雪が積もります。

コロラドの人口には訳 460 万人の人が住んでいますが、内訳は 82% が白人、黒人が 3.8%, アジア人が 2.2% 程だといわれています。また、コロラド州の人口の半分がデンバーに住んでいるため、ここコロラドスプリングのアジア人比率はとて低いと言えます。

コロラドカレッジは、全生徒数 2000 人ほどの小規模な私立のカレッジで、言語学習に力を入れている学校です。半年かけて、4-5 クラスを受講し続けるセメスター制と違い、3 週間半をひとつの区切り目、1 ブロックとして、その間集中して(ほしい)ひとつの授業を受けるというブロックシステムを使用しています。

私は、このコロラドカレッジで、Cultural Program Coordinator(CPC) として働きながら、一年間に 4 科目の授業を聴講しています。CPC という仕事は、日本の文化を紹介するプログラムを催したり、お手伝いする仕事です。日本の文化に関係のある催し物がある場合は、お手伝いしなければいけません。また、最低でも月に一回は Cultural Dinner Night というような、イベントを開催するようになっています。この Cultural Dinner Night では、おもに日本語学習者を対象に、簡単な日本料理を準備し、それを食べながら日本語学習者間の親交を深めたり、日本語を練習したりするようなイベントです。これまでは、お好み焼きやお寿司、カレーなどを食べながら、カルタをしたり、自己紹介をしあったりしました。前段落でも紹介しましたが、コロラドカレッジはブロックシステムを採用しているため、9,10 月のにブロック間は日本語を学習していても、その後の 2 ヶ月間はメジャーの必須科目(科学など)を履修している生徒さんもいるため、このイベントを通じて久しぶりに日本語学習者全員の顔を見ることができ、とても盛り上がります。その他にも、language table という週に二回の会話練習に参加したり、上級者向けの言語のクラスのひとつを教えたりもしています。また、初級者向けの

日本語の授業があるブロックには、大抵毎日授業に顔を出し、会話の練習をお手伝いしたり、宿題の採点をしたり、授業についていけない生徒さんに、さりげなく放課後ミーティングの機会を与えてあげたりもしなければいけません。大変なように聞こえるかもしれませんが、ひとつひとつの授業の生徒数がとても少なく(10-20 人)、ブロックシステムのおかげで毎日生徒と教室で顔を合わせるので、一人一人の生徒さんのこと(学習レベルなども含めて)を把握しやすく、慣れると生徒一人一人の可愛い所もたくさん発見できて、楽しめるようになってくると思います。生徒さんは、皆凄く可愛いです。

ただ、私のように自分の勉強にも打ち込みたい人は、time management の側面で苦勞するかもしれません。全ての授業(一部の上級者用言語のクラスを除いて)がブロックシステム内で行なわれるため、授業を履修したブロックには、与えられた仕事の上に、自分の授業の課題を毎日、次の日の授業に備えてこなさなければなりません。これは本当に大変で、慣れて来た今でも、私は課題がぎりぎりまで仕上がらないこともあります。アシスタントの仕事がたくさんあると、授業をとることが物理的に不可能なので(出席などの面で)、前もってスーパーバイザーの先生と話し合っ、計画的に授業を履修する事が必要でしょう。やはり、仕事と勉強とを両立することはとても大変ですが、私はその難しさも含めてコロラドでの生活を楽しんでいます。このような素晴らしい機会を与えて下さった、フルブライトの皆様に、感謝したいと思います。

最終レポート

私は、2008 年 8 月後半より、FLTA としてアメリカのコロラド州にあるコロラドカレッジと言う私立大学に派遣して頂き、主に日本語教師のアシスタントをさせて頂きました。前期は、周囲の環境に慣れるのに精一杯でしたが、後期には余裕を持って生活できている自分がありました。アメリカの大学で、日本語教師のアシスタントとして仕事をさせて頂きながら、同時に学生としても時間を過ごさせて頂けると言う貴重な経験を通して、精神的に大きく成長させて頂いたと思っています。

以下に、私の具体的経験を述べていきたいと思います。

コロラドカレッジでの後期

● 学校 仕事 学業

私のコロラドカレッジでの前期、9月から冬休みまでは、学校生活、仕事、そして学業の三つに慣れることに終始したと言っても過言ではないと思います。自分の仕事にしても、学業にしても、質の高いものを仕上げるということに自分の時間をかけるということは、全くできませんでした。とにかく周囲の環境に慣れることに非常に苦労し、とにかく最低限のものを仕上げることで精一杯でした。これには、コロラドカレッジがブロックシステムと言う、日本人が英語圏の大学で勉強するには非常に厳しいシステムを採用しており、そのシステム下で自分の専門分野に対する理解を深めながらも、慣れない仕事をしなければならなかった、という事があったと思います。私は日本で大学院1年生だったので、学習意欲が旺盛で、授業を履修した時は仕事と両立するのがとても大変でした。

ただ、その多忙な前期の中でやっていて良かった、と思ったことは日本語教師の先生方と、とにかく良い関係を築いたという事でした。後期になってくると、そうして前期で築いて来た信頼関係などから、仕事が本当にやりやすくなったように思います。やはり信頼関係が構築された後、意思疎通がうまくいくようになってくると、自分の気持ちも伝わりやすくなり、相手の気持ちもよく分かり、お互いに不満を募らせるといったこともありません。そうして前には自分でもうまくいっているのかどうかさえ、よく分かっていなかった仕事が、相手によって感謝されている、等々分かるようになってくると、やはり仕事も生活も楽しくなっていきます。このように後期になると、カレッジでの生活がとても楽しくなり、自分の時間や仕事、そして仕事の完成度などまでも客観的に（勿論完璧ではありませんが）ある程度見ることができるようになりました。

● 人間関係/生活面

私は、人間関係を築く上で非常に恵まれた環境に派遣して頂いたにも関わらず、前期には、これに取り組む余裕が全くありませんでした。仕事以外にも、私は学業に対する思い入れが非常に強かったので、慣れない環境で一生懸命に取り組むあまり、周りが見えていなかった一面もあったと思います。

ただ後期になると、自分の仕事や学業をどのように、そしてどの程度までこなせばいいのか、などのコツが分かってくるので、余裕ができ、カレッジで自分と同じような仕事をしている同僚と時間を楽しむことができるようになりました。コロラドカレッジには、日本語の他に、中国語、イタリア語、フランス語、スペイン語各種の教師を私のようにアシスタントしている半学生のような立場の人が一人ずついて、それぞれとても良い関係を築く事ができました。また、私が日本語を教えていた学生とも、クラスの外で付き合える良い関係を築くことができ、これらは私の一生の宝物となりました。

コロラドカレッジでの一年を振り返って得たもの

私は、コロラドカレッジでの一年を通して、仕事をする上での責任感や、同僚や上司との関係の大切さ、またそれに打ち込むことで得る達成感、自分の専門分野に対する知識など、ここには書ききれない様々なことを全身で吸収させて頂いたと思っています。これらの経験を通じて私が学んだことで、ここで是非最後に書いておきたいことは、「異文化」間の人間関係についてです。私たちは、それぞれの属する社会や、その社会の歩んだ歴史、経済、政治状況によって固有の「文化」を持っていると言われていました。アメリカ人ならアメリカ人の、日本人なら日本人の「文化」があるとされ、社会全体の政治、経済などの状況によってそれぞれの「文化」に対して新しい意味付けが常に繰り返されます。確かに、我々にはそれぞれの「文化」によって肯定される相違が、ある程度は認められます。ただ、その相違以上に重要なのは個人レベルの付き合いによる相互理解です。なぜなら、その「文化」とは全く異なってとも言えるほどの個性が、それぞれの人間には生まれているからです。様々な学生と付き合いしていく中で、私はこのことに気付かされない日はありませんでした。我々は違って当然ですが、その違いは紋切り型に固定されたものではありません。常に学び合うことができるのです。

最後に、私が FLTA で素晴らしい経験をさせて頂くに様々な支援をして下さったフルブライト各関係部署の方々に感謝したいと思います。この経験を生かし、私はこれからも「異文化」理解に努めていきたいと思っています。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

金田由起子 ---Tougaloo College

中間レポート

「先生、好きなラッパーは誰ですか?」「先生、ラジオだったら、普段どのヒップホップステーションを聞いていますか?」これは、学生たちの普通の質問である。さて、あなただったらどう答えるだろうか。

私は、日本からの FLTA として、2009 年の夏、ミシシッピ州にある歴史的黒人大学トゥガル大学に派遣された。トゥガル大学は、1960 年代の公民権運動のすぐ後、アフリカンアメリカンのために創設された私立大学で、現在も学生の 99% がアフリカンアメリカンである。全学生合わせて 900 人程のとても小さな四年制のリベラルアーツ大学である。

外国語はこれまでスペイン語、フランス語が教えられていたが、今回、新たな外国語として、日本語が導入された。私は、日本語の主導教員として自分の授業を担当することになった。期待と不安を胸に臨んだ授業初日、クラスに入って目を疑った。学生がひとりしかいなかった。「僕一人で、授業開講できるのですか?」彼の質問が胸に刺さった。自分の存在意義はあるのか。そんな思いが駆け巡った。その後、日本語のクラスを宣伝する日々が始まった。そもそも、アジア人がほとんどいないミシシッピで、日本人を見たことある学生など、ほとんどいなかったのである。彼らにとっては、私はどこぞの星からきた異星人。「先生は、スペイン語の先生ですか?」と恐る恐る尋ねる学生さえいた。ヒップホップのかかるカフェテリアに行き、ピラを配り続けた。私の肌の色と自分の肌の色を比べ合う男子学生、髪の毛を触ってもいい?と尋ねる女子学生…。だんだんと学生が私の存在を受け入れ始めてくれたのか、秋学期には 6 人の学生が集まった。授業中に出る彼らの質問は、どれもとても興味深いものだった。「日本のアニメに出てくるキャラクターは、なぜみんな白人みたいなんですか?」と、答えるのに一苦労す質問もあった。

実は、ミシシッピ州は、米国では深南部といわれ、人種差別が最も激しい地域であった。今でも白人居住区と黒人居住区は、明らかに分かれて存在しており、スーパーマーケットに入るだけで、どちらに属するスーパーなのか一目で分かる。近くには、綿花畑が広がり、ブルースの聞こえる酒場などがあちこちに点在している。人種。日本に住んでいた今まで意識したことのない問題。この大学に派遣され、学生たちと日々を過ごしていく中で、それがどれだけ大きなものなのか



初めて実感した。2008 年 11 月 4 日、私はこの日を一生忘れることはないだろう。米国大統領の一般投票日、私は、選挙を手伝わせてもらった。学生と共に、「VOTE TODAY」(今日は選挙に行こう) というプラカードを持ち、道路の脇に立った。家に帰り、テレビを見た。オバマ氏に決まった瞬間、学生から一気に電話がかかってきた。「アメリカ国民であることを誇りに思う。我々の大統領は、アフリカンアメリカンである。」彼らの心からの喜びだった。

FLTA は、日本語の授業を担当する以外に、米国に関する授業を履修することができる。私は、「アフリカンアメリカンの歴史」という授業を受講した。20 人のクラスに、たった一人の黄色人種。最初、教授は驚いていたが、常に私に気を配ってくれていた。この授業を受け、私が日本で学んだアメリカの歴史は、白人の視点からの歴史だったことに気づいた。捉え方によって、ここまで歴史の語りは変わってくるのかという事実を知った。

最初の学期は、予想もしないハプニングの連続で、このまま続けていけるのか不安に思い続けていた。しかし、今日まで無事に続けていられているのは、周りの人のサポートがあったからだった。南部には「サザンホスピタリティー」という言葉がある。南部の人のフレンドリーさに勝るものはこの世にないと思う。「日本では人に頼ったりしなかったってえ?でも、お前は今、アメリカにいるんだろう?なんでも頼ればいいじゃないかあ、え、そうだろ?」独特の南部訛りで言われたこの言葉は、凝り固まり怯えた私の心を解きほぐしてくれた。

2009 年 1 月、私にとって最後の学期が始まった。学生は、なんと 11 人に増えた。3 月にはニューオーリンズで行われるスピーチコンテストに出場することになっている。私は、アフ



リカンアメリカンの歴史に加え、「ブルースの歴史」という授業を新たに履修することにした。アメリカ生活は残り4か月を切った。私に何が出来るか。このような貴重な機会を与えてくれた日米教育委員会、フルブライトアメリカ、IIE、そして、ミシシッピアンに感謝を込め、残りの生活を過ごしていきたいと思う。

最終レポート

「Kaneda-sensei! I miss going to your class.」(金田先生! 先生の授業がなくて寂しいです。) 任務を終え、日本に帰国してからというもの、心ここに有らずだった私にふと届いた学生からのEメール。まるで私の気持ちを表しているかのようなそのEメールを見て、思わず泣きそうになった。永遠に終わりが来ないのではないかと不安な気持ちいっぱい迎えた1日目から、月日は流れ10カ月…。とうとう終わりを迎えてしまった。私にとってこの10カ月は、決してあっという間ではなかった。一カ月、一週間、一日を今まで経験したことがないくらい必死で生きた。すべての瞬間が、刺激であり、挑戦であった。最初の半年間は、まるで赤ちゃんになったかのようにだった。初めての海外生活、初めての一人暮らし、初めての教師生活。分からないことだらけで頭がおかしくなりそうだった。しかし、物事は進んでいく。ソーシャルセキュリティーナンバーの取得、携帯電話の契約、インターネットの接続、中古洗濯機の購入…。日本にいたら何でもないことが、ミシシッピでは全く出来なかった。南部訛りが全く聞きとれず、電話がかかってくるのが怖くて仕方なかった。大学では、前任の日本語教師がおらず、赴任早々、仕事が山のように降ってきた。「授業で使う教科書とワークブックは、自分で選んでブックストアに予約しておいてね。」「シラバスとコースアウトラインを自分で作って、今月末までに3部提出して。」とどんどん指令が出された。日々の授業だけではなく、「来週、〇〇教授のクラスで『日本の戦

後の天皇崇拜』について50分の講義やって。」「今度の教授会で、オンラインコースの使い方についてプレゼンして。」と様々なアクティビティーを必死でこなす日々。まさに、生きるか死ぬかのサバイバルだった。

身体的にも精神的にも疲弊しきっていたある日、大学副学長の妻であるサンドラに出会った。耐えきれなくなって自分の気持ちを打ち明けると、彼女はある言葉をかけてくれた。「Yuki, I'll tell you one thing. Keep on opening your mind.」(ゆき、ひとつ教えてあげるわね。常に心を開き続けてごらんさい。) その言葉を聞いた時、すとんと肩の力が抜けた。誰も頼れる人がいない、誰も私を助けてくれない。すべて自分でやらなくてはいけない。そう思いこんでいた私は、誰かに相談したり、一緒に進めることを忘れ、自分の殻の中に閉じこもっていたのだった。サンドラの言葉を聞き、それから思い切って、色々な先生たちに相談してみることにした。出来ない時は、出来ない正直に言い、どうしたらいいのかアドバイスをもらった。心を開いたのは先生たちにだけでなく、学生にも素直に表すことにした。訛りが強すぎて分からない時は、スペルで表現してもらい、目には見えないアフリカンアメリカン文化は、一緒に体験してみることにした。すると、今まで絡まっていた糸や張り巡らされていたバリアが一気に解けた。この体験は、まさに驚きだった。

12月にワシントンDCでフルブライトのワークショップがあった。そこで、日本のFLTAたちと再会し、世界各国から集まった400人以上のFLTAたちに出会い、自分たちの経験を共有した。気楽に過ごしてきたFLTAは一人もいなかった。皆、悩みを抱え、困難を乗り越え、本気で毎日を過ごしていた。ワークショップ最後日の夜、ダンスパーティーで楽しそうに踊る世界中の英語教師を眺めながら、「後期はもう恐れないぞ。」と心に決めた。

1月に授業が再開し、また多くのミッションに巻き込まれた。しかし、肩の力が抜けた私は、それを楽しめるようになっていた。自分の経験を他の先生たちとシェアしたいと思い、ミシシッピ州国際教育者学会(MAIE: Mississippi Association of International Educators)で、フルブライトプログラムについて発表することにした。そこで出会った教授や学者の先生方とは、その後も連絡を取り合い、進路相談などにももらった。授業では、学生たちが生まれて初めての「日本語スピーチコンテスト」に参加した。コンテストは隣の州で行われたのだが、学生たちを車に乗せ、ハイウェイを100kmで飛ばしながら学生たちのスピーチの最後確認をするほどに、あの赤ちゃんだった私はたくましくなった。会場に着き、「こんなにたくさんの日本人を見たの初めて! 何だか日本にいたい! すごいね!」と興奮する学生たち。日本人は、領事館や他の大学からいらしゃった10人ほどだったにも関わらず…。そんな彼らを微笑ましく思いながら、私がここにいる意味は少しでもあるのかもしれないと心をなでおろした。

任務が終わる1ヵ月前に、大学のお祭りがあった。そこで私は、何か出来ることはないかと考え、学生たちと一緒に「ソーラン節」を踊ることにした。カフェテリアの前でいつも踊っている彼らにとって、ダンスは大好物!授業が終わってから講堂に集まり、大音量でソーラン節をかけながら、「もう動けないー!」と汗びっしょりになって練習した。本番には、領事館から送ってもらったハッピを着てステージで発表した。立ちあがって一緒に踊ってくれる学生もたくさん出てきて、大いに盛り上がった。

ちょうど1年前に派遣先が発表された時、私はこんなことをすることになるなんて夢にも思っていなかった。指導教官から、「私たちの大学は歴史的黒人大学で99%の学生はアフリカン・アメリカン。日本語のコースはこれまで皆無だったので、学生を募集するところから始めます。」と言われた。そんな中に、私ひとり日本人が飛び込んでいって何ができるのかと途方に暮れた。目標は、学生たちが一生のうちでJapanという単語に出会った時に、そういえば昔、日本人らしき人が大学にいたなと思ってくれることにしたのを思い出した。さて、その10ヵ月を終え、果たしてその目標は達成できたのか。

前述した帰国後に届いた学生からのEメール。実は、このメールの後に、衝撃が走る。「Two of your students are coming to Japan!」(先生の学生2人が、日本に行くことになったよ!)なんと、大学が申請していた奨学金がめでたく通り、学生を日本に送ることが出来ることになったというのだ。夏休み中の3週間、日本語トレーニングプログラムに参加するという。2人とも海外はおろか、州の外に出たこともほとんどない。初めての飛行機に緊張しているようだが、これはきっと彼らにとって日本人を10人以上目の前にするいい機会になるはずだ。FLTAプログラムは帰国して終わりというものではない。日本、アメリカ双方が歩み寄るためのきっかけとして、様々な形でこれからも発展していくものだと思う。

最後に、このプログラムに参加したことは、私自身にとって大きなターニングポイントになった。この機会を与えてくれたフルブライトアメリカ・ジャパン、IIEスタッフの方々をはじめ、英語・日本語教育に携わっている先生方、ミシシッピ在住の貴重な日本人の方々、派遣大学の教授・学生たち、世界のFLTA同志たち、そして、常に私を支え続けてくれた大切な友達と家族に、心からの感謝を送りたい。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

金城佐和子 ---Beloit College

最終レポート

私は2008年8月～2009年5月にかけて米国・ウィスコンシン州に所在する私立 Beloit College に FLTA プログラム第一期生として派遣されました。プログラムに参加させて頂く前に「日本語教授」という仕事に直接関わったことはなく、色々心配な点多々あったことを覚えています。そこでまず、プログラム採用通知が来てから派遣されるまでの期間に、日本語教授法の本や現地で使う教科書(げんぎ)を手に入れて読んだり、日本文化を伝えるための資料や伝統工芸品を収集するなど日本に滞在している間に出来る限りの準備をしました。

1. 派遣先大学での仕事内容

a. 秋学期 (2008.08~12)

Beloit College には Japanese Studies という専攻が設けられており、日本人とアメリカ人の専任教授(二名)がいらっしました。私はその二名の教授の元で TA (Teaching Assistant) として任務させて頂きました。まず、秋学期に担当させて頂いたのは一年生(2クラス分、1コマ1時間/週4回)と4年生(1クラス、1コマ2時間/週2回)です。一年生のクラスでは担当教授の元で会話パートナーや発音補助、教材作り補助、宿題の添削を行いました。また、四年生のクラスにおいては、エッセイやテストの添削などだけではなく、クラスの始めの20分間は私がパワーポイントを使ってクラスの導入部分を教えさせて頂きました。

b. 春学期 (2009.01~05)

春学期のクラスにおいては、1年生(2クラス分、1コマ1時間/週4回)と2年生(1クラス、1コマ50分/週4回)、4年生(1クラス、1コマ90分/週2回)のTAを担当させて頂きました。1年生と4年生のクラスは前学期からの引き継ぎでしたので、仕事内容がほとんど変わらなかったため比較的容量を得ることができました。2年生のクラスでは専任教授のもとで会話パートナーや発音補助、文法の説明等を主に担当させて頂きました。

c. 授業外の語学学習補助活動(ジャパンテーブル)

日本語のクラスを取っている中級～上級レベルの生徒を対象

に週2回ランチタイムにてジャパンテーブル(1時間程度)を設け、ネイティブスピーカーと直接日本語で会話する活動を秋春学期に担当しました。大学に日本人学生が少人数しかいなかった為、ネイティブスピーカーと日本語会話を練習したいという意欲的な生徒が毎回必ず10人程度は訪れ、私以外の日本人学生も誘って日本語クラスを取っている学生たちになるべく生の日本語に慣れてもらうようにしました。ジャパンテーブルでは、日本語のクラスで理解できなかった文法や表現の説明を求めに来る学生もおり、教科書を一緒に見ながら実際に生徒たちが分かりにくいポイント等を把握するための情報交換の場にもなりました。

d. チューター

TAを担当している各学年のクラスで、著しくクラスに追いついていない学生(各クラス1～2人程度)の授業外でのチューターを1時間ずつ担当しました。チューターは主にクラスの復習に力を入れました。教科書の練習問題を解いてもらい、間違ったところを一緒に考えながら復習するという形式でチューターを進めました。一対一のチューターの場合なら問題はないのだが、生徒が複数人いる際は一人一人のレベルが違うため教える際にもさらに注意を払う必要がありました。大学時代に中学生の家庭教師のアルバイトをした経験があった為、チューターの仕事は比較的取りくみ易かったと思います。

e. ジャパンクラブの運営

Beloit College の周りはアジア系のスーパーや繁華街といったものがほとんど無く、その意味でもジャパンクラブは学生たちが日本文化に触れる数少ない機会だったと思います。ジャパンクラブの運営に参加することで、FLTA プログラムの目的の一つである Cultural Ambassador を達成できたのではないかと思います。ジャパンクラブでは主に茶道の実践や日本の文化紹介のプレゼンテーション、日本食の試食会などを行いました。

2. 履修したクラスについて

私は主に American Studies のクラス("American Romanticism", "Woman, Race, and Class", "20th Century American Literature", "International Prose and Poem")を受講しました。将来、日本で英語教育に関わっ

ていく上でアメリカ文化や社会、歴史等をアメリカ本国で学べるという機会は大変貴重なものになりました。勿論、英語でペーパーを何度も作成するという作業を通して英語力の向上にも大いに繋がったと思います。履修したクラス以外にもハンガリー語のクラスも聴講させて頂けることになりました。ハンガリー語という学習したことのない外国語のクラスに参加することで、アメリカにおける外国語教育の実態を把握することも出来たと思います。ハンガリー語のクラスでは、生徒を能動的に参加させるスタイルを終始取っており、教授法等も今後の日本での英語教授法の参考にもなりました。

3. FLTA プログラムを終えて

私にとって米国留学は今回が初めてではありませんでしたが、「日本語を教授する」というプログラムの主旨を通してより具体的・実践的に外国語教育を研究する貴重な経験となりました。日本だけでなく諸外国の FLTA のメンバーと関わったこともより世界的な視野を広げる良い刺激になっています。彼らとは現在でも連絡を取り合い、世界中の外国語教育のエキスパートたちとネットワークが出来たことも本プログラムの大きな財産となっています。FLTA プログラムで得た知識・経験を英語教育を通して次の世代へと還元できるように日々邁進して行きたいと考えております。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008 年度 参加者レポート

大村 恵美子 ---Wittenberg U.

中間レポート

私が Wittenberg 大学に派遣されることが決まったのは 2008 年 5 月で、すぐ 8 月に渡米し、Wittenberg 大学に来ました。Wittenberg 大学はオハイオ州スプリングフィールドという小さな町にありますが、州都コロンバスまで一時間ほどです。Wittenberg 大学はリベラル・アーツの大学で、学生数は 2000 人ほどの小さな私立大学です。実は、コロンバス周辺には某日系自動車会社の工場があるようで、日本食レストランやスーパーがいくつかあり、日本語教育にも良い環境と言えるかもしれません。



Wittenberg 大学には日本語の先生が二人います。一人はアメリカ人の先生、もう一人は日本人の先生です。私の仕事は主に 4 つで、先生方のクラスを手伝うこと、ラボで Tutoring すること、授業外で会話テーブルや映画鑑賞などを企画すること、Festival などのイベントを補助することです。授業内では、板書をしたり、単語や会話の音読をしたりします。また、学生の様子を見てサポートするのも私の大切な役割です。ラボでの Tutoring の時間は学生とコミュニケーションを取る大切な時間です。学生はネイティブ・スピーカーを恐れる傾向があるので、易しい日本語を使って積極的に話しかけるようにしています。ラボには私の他にも日本人の学生一名とアメリカ人の学生四名がチューターとして働いています。私が日本語文法を説明できない時に、アメリカ人のチューターに助けを求めらる場面もあり、チューターをととても信頼しています。その他には日本語の環境を増やす為に、会話テーブルを設けています。さらに今学期は映画鑑賞の時間を設置することで、日本文化や日本人の生活についての理解を深めるよう試みています。最後に、毎年行われる行事を補助するのも私の任務です。先学期は百物語と East Asian Studies Festival が

ありました。自主的に参加してくれる学生もいますが、私が背中を押さなければいけない場合もあります。そうした場面の為にも、学生に普段から信頼してもらうことが大切なのだと改めて感じました。



私の受講している授業は、先学期は ESL とジェンダー学、今学期はアメリカ史と教育発達学・特別支援教育です。一般的に日本の大学と比べてアメリカの大学は厳しいと言いますが、本当にその通りだと思います。また、Wittenberg 大学では大抵のクラスが 1 クラスにつき学生数 30 名以下という少人数教育が徹底していることから、授業で求められるレベルは高いです。それに、教授はみな驚くほど熱心なのです。FLTA というプログラムには、派遣先大学への到着前のオリエンテーションと一学期終了後のワークショップが含まれています。これらも非常に有効で、世界中から来た FLTA と数日間講義を受け、共に過ごします。世界から集まった英語教師志望あるいはすでに英語教師経験のある人たちと意見を交換し合ったりできるのです。このような機会を与えられることはなかなかないことです。

Wittenberg 大学に来てまず驚いたことは、「日本人だ」と言うアニメやマンガなどのポピュラー文化について尋ねられることです。日本語の学生の多くがそういった文化に精通しており、私の知らない「新たな日本文化」の存在を意識せざるを得ません。そうした文化についても学ぶと同時に、私が知っている「伝統的日本文化」や「日本人の日常生活」についてできるだけ教えることも私の使命だと感じています。ここに来て、「日本」について視野が広がりました。将来英語を教える立場になることを考慮すると、外国人の視点から見た日本あるいは日本自体について自らが学ぶことはいい経験になると確信しています。不安を抱えながらオハイオ州まで来ましたが、



Wittenberg 大学は教授もスタッフも学生もフレンドリー、そして何よりも熱心でこれ以上ないほどの環境で学んでいます。残された時間を有意義に過ごせるよう、日々行動していきたいと思っています。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

新川美幸 ---Carleton College

中間レポート

私は昨年の9月からミネソタのノースフィールドにあるカールトン大学で日本語の補佐として働いています。カールトンでの私の仕事を大きく分けると、2種類に別れます。1つは、日本語の授業に携わった仕事です。宿題やテストの採点、作文の添削などがあります。私は1年生と2年生のクラスの学生を担当しているので、両方の授業でワークブックの宿題が出た日などは50人分のワークブックをその日のうちに採点しなくてはならず、本当に大変です。時間も予想以上にかかり、採点だけで3、4時間費やしてしまうことも多くあります。しかし、日本語の補佐をするにあたって、学生の提出物をきちんと見るのはとても大事なことだと考えます。学生の伸び具合が分かるのも勿論のこと、出来具合に対するコメントも自由に書けるので、採点や添削をしているときに一番学生との距離を縮められていると思う瞬間です。あとは、1週間に5時間オフィスアワーというものがあり、学生が質問に来たり、学生と会話の練習をしたりします。



もう一種類の仕事は、日本語を教えるというよりも日本の文化を教えるというものです。それぞれ一週間に一度ですが、「映画の時間」、「ランチテーブル」、「お茶の時間」、「ラジオの時間」というものがあります。映画の時間には日本語の映画を見せます。英語の字幕付きですが、たまにセリフを聞き取れた学生は嬉しそうです。ランチテーブルでは、昼食を食べながら日本語だけを話すというものです。日本語の教授三人も来てくださっているので、学生にとってみれば他の学年の学生とも日本語を練習できるし、先生とも深い話ができる機会である

のでとても人気があります。お茶の時間には日本のお菓子とお茶を飲みながら、日本の遊びを教えます。最近では「ふくわらい」をして日本のお正月の文化を教えました。ラジオの時間では、学校のラジオ局を使って一時間日本の話題について話したり、ときには日本の音楽を流したりします。この他に、なるべく1ヶ月に1回は日本のパーティーを開いて、日本語の学生に日本食を振る舞うようにしています。今までした中では、おにぎりパーティーが好評でした。お正月には、書き初めパーティーを開き、学生はお雑煮も食べられて、人生初めての書き初めも体験できてとても満足そうでした。今学期は「節分パーティー」と「お雑祭りパーティー」を計画中です。

これら日本語の仕事以外に、私は他の学生と同じ様に授業を取っているため、自分の宿題もしなくてはなりません。お互いを両立させることはなかなか難しいですが、そんなときは日本語の仕事を優先させることにしています。「学生第一」という考えのもと、カールトン生活を送っています。私は将来、日本で中学校の英語教師になりたいと思っているので、ここでの経験が将来に役立つことだと日々実感しています。フルブライト奨学金に全て支援していただいて、カールトンに来られたことを本当に幸せに思っています。残りのカールトンでの半年を、悔いなく、学生の日本語がより一層上達するように精一杯頑張りたいと思います。



最終レポート

日本へ帰国してから、約1ヶ月が経ちました。FLTAとして、ミネソタ州のカールトン大学へ派遣していただき、日本語アシスタントとして働いていたあの頃の生活が懐かしく、いかに特別であったかを気付かされるばかりの毎日です。

春になり、前回の2月のレポートから劇的に変わったことがありました。それは、学生の日本語の伸び具合です。昨年9月に日本を勉強し始め、ひらがなやカタカナも知らなかった1年生が、10ヶ月間の日本語の授業を終えたときには、自分たちで考えたスキットを披露できるまでになっていました。約10分にわたる日本語でのスキットです。自分たちで脚本をし、台詞を覚えるのですが、中には一つの間違ひもおかさなかつたグループがいて、これには教授も私も本当に驚かされました。学生も楽しそうに演じており、本当に嬉しかったです。なぜなら、カールトンへ来て、私がまず最初に決めた目標を達成できた気がしたからです。それは「自分がカールトンに在る間に、学生の日本語が少しでも上達するように、精一杯、手助けをすること」でした。一年しかカールトンに在れないからこそ、とにかく自分をできるだけ活用して、日本語が上手くなって欲しかったのです。私は学生に対して、授業外であっても常に日本語で話しかけ、学生が間違えたときは積極的に注意するようにしていました。初めは困惑していた学生たちも、時が経つにつれて理解してくれるようになり、最後にはどんな内容でも、自分たちが習った範囲内の文法や単語を上手く使って話してくれるようになりました。私の英語よりもみんなの日本語の方が上手なのではないかと思ったほどです。

また、私は日本の文化を伝えることが仕事の一環でもあったので、「映画の時間」「ランチテーブル」「お茶の時間」「ラジオの時間」を、週に1回ずつ、後半期も持たせていただきました。これらのイベントは、自由参加となっています。秋学期、冬学期は20人分ぐらいのテーブルがあつという間に埋まり、席が探せないほどだったランチテーブルも、春学期になると授業の関係で来られる学生が極端に少なくなりました。あまりに学生が少ないと、来てくれた学生が日本語を話す相手がおらず勉強にならないため、こっちは学生集めに必死でした。ポスターを掲示したり、Eメールを送ったり、スタンプカードを作ったりの試行錯誤の日々でした。スタンプカードとは、イベントに来た学生は日本のシールを1つもらえ、それがカードいっぱい貯まると、なにか日本に関連したグッズがもらえるというものです。学生はこのアイデアを大変気に入ってくれ、それ目当てでイベントにたくさん来てくれる学生もいました。ミネソタの冬は、寒いときだとマイナス30度ぐらいにもなりません。そんな極寒の中、自分のイベントのためにわざわざ自分の寮から歩いてきてくれたと思うと、それだけで嬉しくなることもしばしばでした。学生も秋学期と比べると春学期にはすっかり心を開いてくれており、間違えることを恥ずかしがらず、

質問もたくさんしてくれるようになりました。教師と学生間の信頼関係の大切さを改めて思い知らされました。

私は、LA(ランゲージアシスタント)という傍ら、学生として毎学期授業を1つ取ることができたので、私が住んでいたところは学生と同じ寮でした。教師でもあり、生徒でもあるのが、FLTAです。普段、「先生」と呼ばなくてはならない人物と一緒に住んでいるということで、寮内で会うと戸惑う学生もいましたが、そんな中立な立場だからこそ、学生の新たな一面を垣間見られることもありました。毎週膨大な数の単語を覚えなくてはならず、小テストは毎日という中、本当はもう日本語を勉強するのに疲れてきているのではないかと疑問を持つこともありました。しかし、実際は寮の廊下のホワイトボードには日本語でメッセージを書いていたりと、学生の部屋に立ち寄ってみると動画サイトで日本に関するビデオを見ていたり、本当に日本が好きで、日本語を学びたいと思っているんだ!と気付かされ、これはまさに嬉しく、この立場ならではの特権だと思いました。

この10ヶ月、カールトン大学でLAとして日本語を教えられたこと、本当に幸せに思います。素晴らしい先生方、私を信頼して頼ってくれた学生、かけがえのない仲間、本当にたくさんの人たちに出会うことができ、一生に残る特別な経験をすることができました。また派遣先の大学以外でも、フルブライトを通じて、大切な仲間に出会うことができました。私が派遣された2008年には、8月と12月、夏と冬にわたって2回のオリエンテーションがアメリカ国内で催されました。オリエンテーションでは、米国内の大学教授による教授法のセッション、他には生徒の注意を惹く方法をマジシャンがショーを披露して教えてくれるという興味深い内容のセッションまでありました。夏のオリエンテーションでは25人ほどの、冬ではなんと400人ものFLTAに出会うことができました。400人、教師を志す人ばかりです。中には私よりだいぶ年上で、母国では大学で教えていた経験のあるFLTAもいました。みんな、教員を目指す者として、見習うに値する素晴らしい仲間です。オリエンテーションが終わり、それぞれ自分の州、大学へ戻った後も支え合い、たくさんの勇気をもらいました。FLTAの一員として、このオリエンテーションに参加させていただいたこと、またカールトン大学でLAとして10ヶ月日本語教育に携われたことの全てが夢であったかと思うぐらい、かけがえのない経験となりました。このような素晴らしい機会を与えてくださり、常に支えてくださったIIE、日米教育委員会の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に、ありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

多田 利恵 ---Hollins University

中間レポート

女子校出身で、少しばかり教鞭をとったこともあったが、その生徒が全員外国人だったという経験はなかった。自分なりのイメージはあったものの、実際、教室で彼女たちに出会うと、新たな不安と緊張でいっぱいになった。

TAの任務は、派遣先の大学や担当教官によって様々なようだが、私は初級・中級クラスのグループ別会話セッション、そして上級クラスの授業を担当教官と分担して受け持つことになった。私の派遣先である Hollins University はバージニア郊外の小さな女子大で、日本語のメジャーも、マイナーもない。ただ、一年間外国語を履修しなくてはならない。だから、生徒が日本語を受講している理由も様々である。もちろん、日本のポップカルチャーが好きな生徒もいれば、伝統的な日本好きもいる。アルバイト先で日本人を接客する機会があった、あるいは将来日本で英語を教えたい、日本で獣医になりたい、など感心してしまう理由もあれば、日本語しか選択肢がなかった、という正直ものの生徒もいる。そんな彼女たちに、私が滞在するたった一年で、何を伝えられるのだろうか。渡米直後の私の一番の課題であった。

初級クラスのセッションでは、授業の内容を復習し、扱った単語やフレーズを一人一人練習させたり、質問に答えたりしている。もちろん、日本の文化や生活も話題にのぼる。当然会話は英語。しかし、自分の英語力など気にすることはない。生徒たちは語学を習得することの難しさを、十分理解してくれていることに気づいてからは、余計な肩の力が抜け、思ったこと、感じたことをどんどん伝えていこう、と思えた。

秋学期の最後の授業は、生徒たちによるスキットの発表だった。スキットの内容は、それまでに習った表現を用いて、グループで寸劇を作るといったものだった。担当教官からこの課題が発表された時は、「そんなのは無理、できない」という声も上がった。どこの国の生徒も同じなのだろうか、いざ取り組み始めると真剣に、そしてかなり内容を詰めて考えていた。ただ、既習範囲のみでは当然足りず、手を入れざるを得なかったが、新たな、しかも少し高度な表現を知った彼女たちの輝いた表情をみて、難しい表現でもいいから、少しでも多くの日本語に触れることの大切さによりやく気づいた。そして授業当日は、趣向を凝らしたスキットをしっかりと演じる姿に感動してしまった。一見ただ訳した日本語を覚え、好きな衣装を身に

まとい演じているようにも見えるが、やる気のあまり見られなかった生徒までもが生き生きとしている姿を見たり、それまでの過程を思い出したりすると、自分が何のためにここへ来たのか、その答えがなんとなく見え始めた。

もちろん私にとっての学びの場は授業中のみばかりではない。大都市では経験できないこと、感じることをできないこと、言葉に表すことはできないことがキャンパスの内外である。そして日本との違いがあるからこそ、この差が歴然とし、両者の良し悪しがわかり、それぞれが貴重な存在に思えてくる。任期の折り返し地点に立つ今、ここで出会った全てを大切に、教える者として、学ぶ者として、案ずるよりも、欲張りになって何事も体験し、また伝えるべきことを伝えていこうと心に決めた。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

上野 妙子 ---St. Olaf College

中間レポート

私は今、フルブライトFLTAとしてミネソタ州のNorthfieldという小さな町にあるSt. Olaf Collegeで日本語のTAとして働きながら、アメリカの教育について勉強しています。ここSt. Olaf Collegeは学生数3000人ほどの小規模なリベラルアーツの私立大学で、音楽と留学に関する充実したプログラムは全米でも大変知られています。また、学生の多くは複数の分野でB.AをとるDouble Majorと呼ばれているシステムで勉強しています。

ここSt. Olaf Collegeで日本語を学習している学生は約60～70人ほどで、そのうちの3分の1程がアジア研究を専門としています。日本語のコースは4段階のレベルに分けられています。私の日本語TAとしての仕事内容は、レベル1とレベル2の授業での先生のアシスタント、Language Labでの指導、全レベルを通しての個別での会話や文法学習の補助、そして週1回の会話テーブルで日本語の練習と日本の文化を紹介することです。

日本語を履修している学生の多くが日本の伝統的な文化または様々なメディアを通じた現代的な文化に興味を持っており、日本語学習に対する向上心を持っています。彼らとのコミュニケーションを通して、日本人の視点からの文化や価値観、また学生たちのアメリカ人の視点からの日本の文化や価値観を共有できることは、日本語TAとして一番有意義なことだと感じています。

フルブライトのFLTAは日本語TAとして働きながら、1年間にAmerican Studies 1コースを含む4つのコースを履修することができます。私は秋学期にアメリカの歴史に関する授業と教育心理学の授業を履修しました。アメリカ史の授業では、日本という外から見たアメリカではなく、アメリカの内側からの視点を通して歴史を学ぶことができ、とても興味深い授業でした。また、教育心理学ではアメリカの教育制度、教育観について学ぶとともに、アメリカの小学校でのアシスタント体験をすることができました。

また、St. Olaf Collegeには1月にInterimと呼ばれる1コースのみを集中的に学ぶ学期があり、私はこの機会を利用してミネアポリスの小学校で教育実習体験ができるコースを履修しました。普段生活している小さな町Northfieldとは違い、都市部にはヒスパニック系を中心に多様なグループ

の移民が多く生活しています。このコースを通じて、人種や貧困と教育や社会について考え、またアメリカ人のクラスメートたちとディスカッションする機会が多くありました。また新しい大統領を迎えるという、アメリカの歴史が動いたこの時期に、これからの教育についてクラスメートたち語り合えることができ、とても充実した貴重な経験をすることができました。

ここアメリカでの残り半分になりましたが、ここで日本語TAとして語学教師としての経験を積みながら、学生として英語はもちろん教育について学べていることにとっても感謝しています。春学期もTAまた学生として、新しいことを学んだり、経験したり、ここでの様々なアクティビティに参加しながら、有意義な時間を過ごしたいです。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2008年度 参加者レポート

山本 志保 ---University of Montana

中間レポート

モンタナのニックネームはBIG SKY。グレイシャーパークとイエローストーンの2つの国立公園があり美しく、北米の最低気温を保持している州という情報だけを手に、この地に舞い降りて早半年。とても貴重で充実した日々を送っています。



セラキウス大学での派遣前のオリエンテーションを済ませ、同僚となるロシア人のFLTAとともにモンタナ州の小さな空港、ミズーラに近づくにつれて、二人とも絶句。なぜかという、周りは茶色の山々に囲まれたほんとに小さな町だというのが空からみてとれたからです。

空港では、日本語学科のスーパーバイザー、ラビノビッチ先生とだんな様でもあり、モンタナ大学の中国語学科の教授でもあるティムさんが温かく迎えてくださったのでとても安心したのを覚えています。その日のうちに、大学の前を車で通って雰囲気を見せていただき、大学の状況、日本語クラスの様子を少し伺い、ますます期待に心を弾ませました。

次の日早速大学に行き、他国からのFLTA陣、ロシア、スペイン、トルコ、オーストラリア、アイルランド人と私を含め6人と、今年からのインストラクターである日本人とフランス人を含め8人で大学の契約内容に目を通したりやキャンパスの案内をしてもらいました。大学の方、海外から来ている方、全員が全員とも、とてもいい人(お世辞ではありません。)で本当に恵まれているなあ、と日々感じています。大学のキャンパスも落ち着きがあり、レンガを基調としたビルと芝生のコントラストがポストカードみたいに美しいところです。

ミズーラの街は、安全でとてものかかるところですが、おしゃれなレストランなどたくさんあり、大学からダウンタウンまで徒歩で行ける範囲内な



ので、便利です。また、本数は一時間に一本くらいなのですが、どこに行くにもたいていバスが通っているので、慣れてしまえば、さほど不便さは感じません。アジアンマーケットはありませんが、スーパーに味噌、豆腐、麺類など売っています。

さて、肝心のモンタナ大学の日本語学科の事情についてですが、とても盛んです。びっくりすることに日本人の留学生がとても多く、100人はいると思われます。それが、日本語履修者にいいモチベーションになっていることは間違いありません。今年は初級70人、中級25人、上級10人ほどおり、学生も素直で、穏やかな人が多いです。スーパーバイザーのラビノビッチ先生、エックスリー先生、内藤先生と3人なのですが、みなさん理解があり、アイデア豊富で、おもしろく、笑いが耐えません。教科書は「ようこそ」(初級・中級)を使用しています。私の役割ですが、主に授業中でのアシスタント、宿題や作文、テストの採点、週に一度の会話テーブルの参加などです。授業は、自分が望めば一人で教壇に立つ機会があります。この学生は毎日宿題を提出するので、宿題採点でもそれなりに時間がかかります。しかしやはり、生徒が日本語で話しかけてくると、とてもほほえましく、うれしい気持ちになります。



このように、私は素晴らしい経験をさせてもらっています。モンタナ大学に派遣される人はとてもラッキーだと思います。質問などありましたら、いつでもメールにて連絡してください。